

『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』 第一号（二〇〇六年三月発行）抜刷

道中日記にみる四国遍路

「四国西国順拝記」を中心に

井上 淳

道中日記にみる四国遍路

「四国西国順拝記」を中心に

井上 淳

一、はじめに

近年、江戸時代の道中日記を素材とした本の刊行が相次いでいる。例えば、西和夫編の『伊勢道中日記 旅する大工棟梁』⁽¹⁾では、相模大山の大工棟梁である手中明王太郎敏景が、天保十二（一八四一）年に伊勢をはじめ金毘羅宮・善光寺などを参詣した際の道中日記をもとに、他の道中日記との比較など幅広い視点からその旅の検討が試みられている。金森敦子の『芭蕉はどんな旅をしたのか 「奥の細道」の経済・閑所・景観』⁽²⁾では、その眼は松尾芭蕉の「奥の細道」の旅に注がれつつも、芭蕉以降の東北を旅した旅人たちの道中日記を多く取り上げることにより、一日の歩く距離、泊まった場所、閑所の様子、旅にかかる費用など、江戸時代の旅の具体像にも鋭く迫っている。また、旅で泊まる旅籠屋、飯盛旅籠、本陣など多様な宿の姿を紹介した深井甚三『江戸の宿 三都・街道宿泊事情』⁽³⁾、団体旅行、温泉好き、大量のおみやげのルーツを江戸時代に求めた神崎宣武『江戸の旅文化』⁽⁴⁾、伊勢参宮に関わる様々な費用を算出した金森敦子『伊勢詣と江戸の旅 道中日記に見る旅の値段』⁽⁵⁾など、江戸時代の旅をテーマにした新書も多く刊行されており、このテーマへの関心の高まりをあらわしている。

このように、道中日記の資料的な価値に着目した研究が進み、多彩な切り口から江戸時代の旅の実態が明らかになりつつあるが、しかし一方でそこで取り上げられている道中日記のほとんどが、伊勢参りやそれにともなう西国三十三カ所巡礼のものであり、そこに一定の偏りが見られることは否めない。そこで、本稿ではこれまであまり取り上げられなかった四国遍路の道中日記に着目することで、大金をはたいての伊勢神楽の奉納や大量のおみやげの購入など、娯楽という文字でくくられがちな江戸時代の旅の姿を相対化していきたい。

具体的には、京都の商人が文化六（一八〇九）年に四国遍路と西国巡礼を行った際の道中日記、「四国西国順拝記」⁽⁶⁾（以下、「順拝記」とする）を取り上げる。四国遍路の道中日記について言及している研究はこれまでもいくつかある。⁽⁷⁾ 其中で多くの研究が扱っている道中日記は、京都智積院の僧、澄禅が承応二（一六五三）年に四国遍路した時の『四国遍路日記』であるが、この道中日記は四国遍路の普及を志した修業僧の日記であり、四国遍路の大半を占めていた民衆の日記とはいえない。上層農民が書き記した四国遍路の道中日記も確認されているが、その大半は日付、地名、寺名と金銭の出納を簡単に書き記したものであり、江戸時代の四国遍路の内実をうかがうにはあまりにも情報量が少ない。ところが、ここで取り上げる「四国西国順拝記」は道中の様子は勿論、食事や宿泊した宿の感想に至るまでかなり細かい記述がなされており、極めて具体性に富んでいる。ここでは、情報量が多いこの「四国西国順拝記」を中心に、他の四国遍路の道中日記も用いながら、江戸時代の四国遍路の実像に迫りたい。また、文字資料である道中日記だけでなく、大和田原本の仏絵師西丈が四国遍路した時に描いた「中国四国名所旧跡図」⁽⁸⁾など、絵画資料についても一部活用を試みる。

二、「四国西国順拝記」の内容

「四国西国順拝記」は、平成十年度に愛媛県歴史文化博物館が大阪の古書店より購入したものである。全体は四冊からなり、構成は第一巻が四国遍路の案内記、第二巻が西国巡礼の案内記、第三巻が道中日記になっており、そして第四巻に四国遍路の納経帳が付属している。第一巻と第二巻は『四国遍路道指南』

や『四国遍路霊場記』などの既存の案内記からの引用がほとんどであるに対して、第三巻は実際に旅した際の道中日記となっている。

第一巻の冒頭にはこの旅の往来手形の下書が記されているが、それを掲げると以下の通りである。

道中往来一札 下書

一 京都烏丸通五條下ル町住人升屋徳兵衛と申者、代々東本願寺門徒二而当寺旦那二紛無之候、此仁年来願望二付今般諸国霊仏霊社等巡参仕度同行左之通召連罷出申候、道中二於而萬一病死等如何様之義有之候共、其所如御定法御取置可被下候、尤同行之者御座候之間願筋等有之候ハ、御取上御聞届可被下候、勿論此一札を以往来共道中川々宿々 御関所無滞御通シ可被下奉願候、依而往来一札如件

文化六年巳二月

東本願寺末光善寺掛所烏丸通魚店下ル所

唯願寺 印

同行

道中川々宿々

御関所

御役人中

往来手形は東本願寺の末寺である唯願寺が作成したものであり、この旅が「烏丸通五條下ル」に住んでいた京都の商人升屋徳兵衛一行によるものであったことが分かる。

では、この京都の商人升屋徳兵衛がなぜ遍路・巡礼の旅に出ることになったのかについてであるが、これは道中日記である第三巻の序の記述によりうかがえる。

文化六巳年に此度四国偏礼をおもひたちしは、弥四郎甲子のとし風度病氣

におかされて、霜星をかさねて仏神御加護を蒙りたき存念、祈念信心すといへとも今にそのかきもなし侍り、何卒此たひは伏見しる人にて市右衛門殿と云人の御思召より、四国参詣宜しき仰下されてより一統に気ふく致され参詣す相定り、

ここには、弥四郎という人物が原因不明の病気になったため、平癒を祈って遍路・巡礼に出ることになったことが記されているが、この弥四郎と最初の往来手形にあつた徳兵衛との関係は、別の記述により子供と父親であることが判明する。また、旅にはこの親子二人のほか弥四郎の妻、せむが同行している。弥四郎とせむとの間には二人の子供がいたが、せむは夫の病気の平癒を祈って、兄の弥太郎を自分の親の里に、妹の方を乳母に頼み非常なる決意をもってこの旅に臨んでいる。また、この旅には荷物をもつ荷物人が一人付いている。荷物人は、この旅が病人と女性を連れた旅であることを考慮して雇ったものと思われるが、升屋がこうした長期の旅において荷物人を雇うことができるような裕富な商家であつたことがうかがえる。

つまり、「順拝記」は、升屋徳兵衛(徳子)、弥四郎(弥子)、せむ(専子)、荷物人(庄子)の四人による旅ということになる。その主なルートをあらかじめ整理しておく次のようになる。

京都(二・二九) 高砂(三・四) 丸亀(三・六) 金毘羅(三・七)
 七八番道場寺(三・八) 阿波鳴門(三・一三) 徳島(三・一七)
 土佐甲浦(三・二三) 三番五台山(三・二九) 伊予城辺(四・九)
 道後(四・一六) 堀江(四・一八) 飯島(四・二〇) 大三嶋(四・二三)
 七七番道隆寺(五・一) 丸亀(五・五) 牛窓(五・七)
 城之崎湯本(五・一四) 桑名(五・二五) 伊勢参宮(五・二七) 熊野権現(六・三) 紀三井寺(六・八) 石山寺(六・一五) 京都(六・二二)

このように「順拝記」は、文化六（一八〇九）年二月二十九日に京都を出発してから四国遍路と西国巡礼をめぐり六月二日に京都に戻ってくるまでの一二日間に及ぶ旅の記録といことになる。「順拝記」の旅は、関東・東国の旅人の最も典型的なコースとされる「伊勢参宮+西国巡礼ルート」に四国遍路と金毘羅・厳島参詣を加えたかなり充実したものであった。それでは次に、この一二日間という長期にわたる旅のうち、四国遍路の部分に限定して、他の道中日記なども援用しながら、江戸時代後期の四国遍路の様相をみていきたい。

三、「四国西国順拝記」にみる四国遍路

ここでは、旅をする際の装束や荷物をはじめ、関所における手続きや当時の四国の交通事情、宿や食事及びそれら旅にかかる経費、四国遍路を受け入れる接待などについて検討を加えたい。

（一）旅の装束と荷物

まず、旅装束であるが、四国遍路の一般的な姿を現したと思われる『四国遍路道指南』¹⁰には次のようにある。

一 負儀・めんつう・笠杖・ござ・脚半・足半、^{ゆまが}其外資其心にまかせらるべし、惣じて足半にてつとむべしといひつたへたり、草鞋は札所ごとに手水なき事有て手を汚すゆへに、但草履わらうつにてもくるしからず

負儀は中に荷物を入れ紐をかけて背負うもので、挿絵にも描かれている。めんつうは「面桶」と書き、柳行李の弁当箱である。その他、頭にかぶる笠、手にもつ杖、ござ（草座）、脚半、踵の部分がない足半が記されている。足半を用いるのは、草鞋だと札所によっては手水がなくて手を汚すためで、また草履やわらうつ（藁履）でもよいとされている。

一方、「順拝記」には旅装束について記すところは少ないが、わずかにせむの

み装束の記述をみることができる。

専子聽て旅の繕ひ支度なと貯へ金なと出来候而、夫より青梅色大嶋袴、南京形しゆはん紫紋の衿をかけ、青梅黄格子帯、抱紫紋もめん布三尺おひ着し、白木綿脚半足袋^{せむ}にて笠をふかくきなして、扱草鞋などは、江州長浜の人、あさと云がはかせらるゝを見て

せむは南京形の襦袢に青梅縞の袴を着て、衿には紫の半衿を付け、青梅色と黄色の格子の帯をしめ、足下には白木綿の脚絆と足袋を付けて草鞋をはき、頭には笠をかぶるといふ出で立ちで四国を廻り歩いている。また、この青梅縞の袴が四国にはないような京都における当時の最新の流行をあらわすものであったことは、接待を受けた際の地元の女性とせむとの次のような会話からもうかがえる。

御施に預り緩々休息致し、御遍路さまい、いつ国と御尋有候御恥しなから京にてさふらと申うち、内室専子青梅袴にて切々うるわしき鳥^{つば}にて何と申と尋られ、御恥しなから青梅しまにてもうしける、彼うち女中二三人京都へ近年のうち参り候ハ、最早田舎へも歸るまじと咄承候

四国遍路というと現在白装束がイメージされるが、寛政十二（一八〇〇）年の四国遍路の記録「四国遍礼名所図絵」に付された挿絵の遍路のほとんどが縞か格子の着物を着ているほか、明治中期の四国遍路の絵馬にも縞や格子、あるいは紺の無地の着物を着た遍路が描かれている。図1は「中国四国名所旧跡図」のうちの一枚であるが、四国遍路をする田原本仏絵師西丈の服装はやはり紺地の着物で、灰色の股引をはき、脚絆をつけている。手には「大和国」と記された菅笠と杖をもち、足にはわらじをはいている。荷物を背中に背負っているが、その中には通常の荷物のほか絵の道具も入っていたためか、やや大きい荷物になっている。いずれにしても、江戸時代後期から明治時代の遍路は、伊勢参り



図1 田原本仏絵師が三津浜の商人と出会う場面（『中国四国名所旧跡図』）

の旅人と同様に丈夫で汚れが目立たない紺、縞、格子の着物を着ていたといえよう。ただし、京都の上級商家出身のせむの場合、そのなかでも当時京都で流行していた青梅縞の着物を着ていたため、他の遍路とはどこか違って見えたように、そのせいか土佐の種崎では六、七十人の村人がせむを一目見ようと集まっている。

次に旅の荷物であるが、この旅に携帯した荷物については、「順拝記」の第二巻の巻末に用意物として記されている。

用意物 札はさみ六百枚斗納経

- 笠 袷単物 俗衣帯 三尺帯 しり当式 巾道着 襦袢 紙大袋 脇差
- 扇子 もゝ引 脚半 打かけ 背覆骨柳 手拭 雨合羽 めし骨柳 風呂
- 鋪小一 紐式間斗式筋 鞋一足 あみ たか 三年袋 半紙 道中記
- たはこ入 きせる 矢立 磁石 火縄 金銀入 油薬 小刀 耳かき
- 小はさみ きり はな尾すけ 菜箸 御守 甘草 たはこ用意 芋銭さし
- 砂糖 漬物 和布刈粉 竹昆布上煮 梅干しそつスミ見合 ウニカウル
- 廣 そてぬき薬 熊膽 半其粉足豆二宜敷 雄黄 五苓散さん薬 寄応
- 丸 里丸子 諸薬 ケイフン らうそく 紙いな 提灯 銭財布 打替
- 火打袋同つち石届上ケ 此外其節考有増を記置

用意物の記述からは、様々なものが宿に揃っている現在の旅と違い、江戸時代の旅人が実によく多くのものを持ち歩いていることがうかがえる。笠・袷単物・俗衣帯・三尺帯・しり当・巾道着・襦袢はいずれも身に付けるもので、もゝ引・脚半は足まわりで虫や茨から身を守った。汗を拭う手拭いや雨具である雨合羽のほか、火縄・磁石・小刀・耳かき・小はさみなど、細かいがあると便利な品々も持ち歩いている。紐は宿に着いた時に張りわたし手拭いや濡れたものを干すのに用いた。また、日々の道中を書き付ける道中日記と矢立も持ち歩いており、この「順拝記」のもとになる下書が記されたものと思われる。砂糖・漬物・和布刈粉・竹昆布上煮・梅干しは保存食にあたるもので、道中や宿で副食に欠く

ような場合に食した。ウニカウル・そてぬき薬・熊膽・半其粉・雄黄・五苓散・寄心丸・里丸子などの薬類も持ち歩いている。このうち、ウニカウルはウニコールのことで一角の牙から製した毒消し・健胃剤、熊膽は熊の胆嚢を干したもので腹痛・気付・強壯用、半其粉は足の豆用、雄黄は石黄に同じで硫化砒素を含む鉱物、寄心丸は食中毒などに効く丸薬である。

また、これらの荷物は一見多く見えるが、コンパクトにまとめて持ち歩いた。「順拝記」ではその様子を次のように記述している。

徳子食物の小骨を負、弥子はもつき風呂敷包を負、専子は白木綿の大三年袋を背中負さふらを見て、切々夫の病氣故かく若き人かか様の出立見るに付ても憐れ身に余り、先其夜はあくた河二而早く泊りけり、切津国播州四国へ渡りては荷物多く、庄子流石の大丈夫の心も屈し給ふて身もつかれける

徳兵衛が荷物のうち主に漬け物や梅干しなどの食料を入れ、用意物に見えるめし骨柳を担ぎ、弥四郎は紐つきの風呂敷包みを負い、せむも白木綿の大三年袋を背負った。それ以外の多くの荷物は荷物人として雇われた庄子がおそらく用意物にある背覆骨柳に入れ担いだものと思われる。荷物が多くしかも山がちな四国において、体が丈夫な庄子もさすがに疲れたと記されている。

(二) 関所における手続き

関西方面から四国遍路を行う場合、まずは瀬戸内海を渡らなければならなかった。「順拝記」の場合を見てみよう。

高砂舟宿、米屋嘉右衛門方二泊り、四日晚六ツ時より讃州丸亀への出船これあり、四人同行舟に乗安々其夜は船中二而休む、五日天気船中
三月六日、天気、昼時二讃州丸亀へ着船、米や弥太夫方へ付往来証文なと世話に相成

「順拝記」の場合、京都を出発後西に進路を取り、西国巡礼の二二番から二四番札所の参詣を済ませた後、播磨の高砂を三月四日の午後六時頃出船、四日・五日の晩は船で過ごし、六日の昼には讃岐の丸亀に上陸している。高砂側の船宿は米屋嘉右衛門、丸亀側は米屋弥太夫で、「順拝記」には丸亀の船宿が上陸後に往来証文について世話をしていることを記している。この船宿による往来証文の世話については、「順拝記」の第一巻にも関連する記述がある。

讃州丸亀へ渡海の時 米屋弥太夫より滞留切手支配所吉人宛請候也、百五文宛出し
切手下書左に写

覚 従来証文差出し跡二而受取

一 京都五條通烏丸西入町 弥四郎せむ同行二人

右当地着船仕往来手形所持見届私稀申処相違無御座候、已上

巳三月七日

讃州丸亀

西原山宗八

四ヶ国御番所衆中様

これによると、本文で往来証文の世話と呼んでいるものは、実は丸亀の支配所が作成する滞留切手のこと、一人当たり百五文を要したことが分かる。この滞留切手については、武蔵中奈良村の野中彦兵衛が天保七（一八三六）年に四国遍路した記録「四国遍路中并接待附万覚帳」にも記述が見える。野中彦兵衛は三月七日に海路丸亀に着船し、役所に往来手形を示し、「順拝記」とほぼ同内容の滞留切手（彦兵衛の場合は揚り切手と記述）を受け取ったことを記した上で、次のようにある。

右之通揚り切手頂戴仕、卷人前せ八料百五文つゝ差出、丸亀西平山町備前



図2 土州韓浦（甲浦）番所（『中国四国名所旧跡図』）

屋藤蔵世話二而賞請申候

船宿の名前に違いがあるものの、手数料の百五文は一致する。船宿に依頼しての「滞留切手」の取得は、瀬戸内海を渡り丸亀に入った遍路が最初に共通して行った手続きといえる。

その後、遍路は国を超えることにそれぞれの関所において様々な手続きが必要となったが、その手続きについては「順拝記」第一巻に記述がある。

阿州御関所 往来所持か御尋斗

土州御関所二而 往来着船丸亀の切手共差出し候処帳面にて下書は凡丸亀同様、文句候故略ス、此方白紙出し日々附仰下され候、泊より其所の庄屋参何人申印判取也、滞留致候へは其届を致也、泊届なく候八ゆきゝの宿これなく候間念を入れ毎夜日つけ可取ものなり

伊予之番所切手の写 何れ廿日程の日数参る也
土佐一国はかりなり

遍路四人脇道無用七日切

巳四月九日

中田介右衛門判有

東多田御番所

阿波の関所は入口は大坂口にあり、出口は穴喰浦にあり、それぞれ改めを受けた。「順拝記」では鳴門へ船で廻ったため大坂口の記録はないが、穴喰浦は三月二三日に通過したとある。阿波の関所ではいずれにしても往来手形をもっているかどうかを聞かれるだけの簡単な改めしかなかったようである。

同じ日に土佐に入り、今度は甲浦の関所で土佐側の改めを受けている。この甲浦関所の姿は、「中国四国名所旧跡図」に描かれている（図2）。番所の建物の横には、いかめしく刺股・袖搦・突棒など捕り物道具が並べられ旅人を威嚇している。建物の中では三人の人物とその前には数枚の紙が置かれているが、

ちようど往来手形や滞留切手の改めを受けているところであろう。建物の前には改めの順番を待つ旅人が並んでいる。

土佐の関所では往来手形と丸亀で作成した滞留切手を差し出し改めを受けた上で、関所より丸亀とほぼ同内容の切手と「日々附」という帳面を受け取った。この「日々附」には、宿泊した所の庄屋より何人が泊まったという印鑑を受け、そのまま滞留する場合には届書がないことには次の宿に泊まることができなかつた。先に記した野中彦兵衛がこの「日々附」の具体例を書き残しているので、その最初だけを示すと次のようなものである。

覚

右式人 三月十四日

伏越御番所口入也

北口逸平 印

入切手式数也

右式人 三月十五日出候

佐貴浜

同所庄屋

佐貴ノ浜村 寺田房五郎

申三月十五日時分土州二而麦収納

右式人 三月十六日 出候

田野村

田ノ浦村 同所庄屋

橋爪伊太郎

高知藩は四国の諸藩のなかで、遍路に対して特に厳しい政策を行い、土佐は鬼国といわれたということは有名な話であるが、このような煩雑な「日々附」

の書類にはそうした一端が垣間見える。「日々附」は道中の村々の庄屋により書き継がれ、最終的には土佐を出国する日、つまり「順拝記」では四月九日に松尾坂の関所において提出された。

伊予の関所はいずれも宇和島藩領にあり、小山において「遍路四人脇道無用七日切」の切手を受けて、最後に東多田の関所に提出した。野中彦兵衛の場合、小山の関所で往来手形と滞留切手の改めを受け、遍路道を通り脇道にそれないこと、宇和島藩領にいる日数は七日を限り、宿は地元との相談で決めること、もし宿に困った場合は庄屋に話し、その指示で泊まることなどの仰せを受けたことが記されている。

(三) 四国の交通事情

次に、四国遍路の交通事情であるが、山野河海があり起伏に富む四国の旅は旅人にとって厳しいものとなった。「順拝記」からも行く手に次から次へと難所が現れている様子がうかがえる。難所とされているところを一通り示すと次のようになる。

四国遍路が始まって二日目の三月九日には、八一番の白峯寺に続く約二七キロの坂道を屏風折にたどえた上で、四国に来て最初の坂道なので、非常に烈しい坂道に感じられ、弥四郎の足の裏には早くも豆ができたことと記されている。また、三月十日の八四番の屋島寺に向かう約一、九キロの坂道、一番霊山寺に向かう三キロの砂道の後に四キロ続く坂道も「烈敷」道としている。

三月十五日の十番の切幡寺から十二番の焼山寺に向かう約十二キロにわたり続く坂道は、「阿州第一の高山巖石けわしき嶮岨」と表現されている。そして、引き続き翌日の十六日の焼山寺から十三番の大日寺へ向かう道も「坂道難所」とされ、高山のため志半ばで果てた遍路の墓が多数あり、一〇〇メートルおきに石地蔵が二五〇体程もあったことを記録に留めている。二十日には、二一番の太龍寺に行く道すがら、山道に倒れていたためか狼に喰われて死んでいる遍路も目撃している。参詣する遍路は口々に回向を唱えながら通り過ぎていく。四国遍路の厳しさを物語る一コマである。この太龍寺の奥院に向かう道について

ても、坂道が烈しい「四国第一の閑地」で山が深く岩が高いことは言葉にもならないと書き記している。

讃岐から阿波にかけては、このように山道が難所となっていた様子が「順拝記」からは見て取れるが、阿波から土佐にかけては、それに加えてさらに無数にある川が遍路を悩ませた。そのことは、三月二一日の月夜村かたうち峠のふもとにあった逆瀬川を渡る記述に詳しい。

逆瀬川は川幅が一〇メートル以上ある谷川である。水流が速いため浅瀬を渡っていくうちに時間がかり唇の色が白くなっていくが、渡らないことには参詣できないため、徳兵衛一行は無理をして渡っていった。弥四郎と荷物人は二人でなんとか川を渡るが、せむは腰まで水がきているため徳兵衛の帯をしっかり握りしめながら渡っていく。ちょうどその時丸亀の遍路四人も徳兵衛とせむにくつつき川を渡るが、河端で足をつきこけそうになっている。せむはこの時水に溺れるのでは思って、恐怖で顔がひきつったとある。逆瀬川は水かさかなりあったようで、着物はすべて濡れ、ここで単のものと着替えるはめになっている。この時からせむは川渡りを恐れるようになったと記されている。

三月二二日には、日和佐より「山々谷々川々難所」である「八浜八坂」(図3)を疲れながらも越えていく。日和佐川は舟渡して紐を引きながら渡っている。翌二三日の阿波と土佐の国境も、峠で「難所」としている。二五日には、野子(野根)を出発してふじ越坂を進んでいる。ふじ坂越は十六キロ程人家がない、右の林は切り立った山になっており、左は海で波がはねあがる「四国第一の難所」と記している。そこは飛石、はね岩、円くなった岩などが多くあり、汐が入ってくる難所で、さらにその間に川も多く、「めいわくす」とある。その難所は『中国四国名所旧跡図』にも描かれている(図4)。海には高い波がうねり、海岸の大きな岩の上を遍路が進んでいる。遍路は大きな岩を飛び越え、はね越えながら進まなければならず、海岸に打ち寄せる大きな波は大石の間をはいりこみ、波がひく時には小さな石をころころところばしたというが、その

「海内無双の難所」を仏絵師西文は荒ぶる波とともに大胆に描写している。

三月二七日には羽根村を出発しているが、この日は朝から川の連続で、奈半

利浦の大川、安田川などの比較的大きな川は舟で渡っているが、それ以外は馬で川を渡ったり、近くの民家の人を頼んで渡ったり、せむを背負ってもらい渡ったりと、川を恐れるせむのためにいろいろな手段を講じている。また、二七番の神峯寺に向かう道は嶺が高く、折り返りの坂道が五キロ以上続く「大難処」と記している。翌日二八日も安芸浦を過ぎて新庄浜の砂道七キロ、その後山道が十キロ続く「難所」とある。

四月一日には仁淀川の河口を舟で渡り、登り坂で岩石が露出している三六番青龍寺を参詣している。二日には再び仁淀川を舟で、四日には四万十川を舟で渡り、五日には足摺に向けて海辺の烈しい山坂を八キロばかり行き、さすがに頑強な人間でも疲れるとある。六日は朝から大雨で悩まされる。この日、三八番の金剛福寺に参詣した後、取って返す道すがら、強い風雨により雨具は裾から吹き上げられ、下の衣服まで濡れている。四国遍路は天気との闘いでもあった。

四月八日には伊布利浦を出発して一の瀬の真念庵大師堂に預けて置いた荷物を受け取り、三九番の延光寺の方面へ行くが、山道がわるい上十二キロの間に小河が五十余りもあり苦しんでいる。これらの川は、山川で川幅が狭いためか割木などを渡して橋としているが、その橋を越えていくのにかんりの時間を要している。九日より伊予に入り、十日には四十番の観自在寺、笹山観音を参詣するが、足も立たない程の烈しい山道で歯の根も合わないぐらいの恐ろしさで書き記している。けわしい山を急ぐが、早くも日は西に傾き不安になるが、やっとのことふもとの宿に入っている。

翌四月十一日にも宇和島への道が「小松原坂道烈敷折ふし」、また十五日には四五番の岩屋寺への道が「難所つよく」とある。しかし、その後松山から丸亀にかけては難所の記述は減り、四月二八日の六五番の三角寺に「山道烈敷」、翌二九日の六六番の雲辺寺に「百町程の山坂嶮岨」とある程度である。

このように、長期間にわたりけわしい山や多くの川に苦しめられる四国遍路の旅は、確実に遍路の体力を奪っていった。「順拝記」においても、四国遍路の旅後半の四月二四日、六十番の横峯寺の参詣後に徳兵衛の気分が悪くなり、せ



图3 八坂八浜（『中国四国名所旧跡図』）

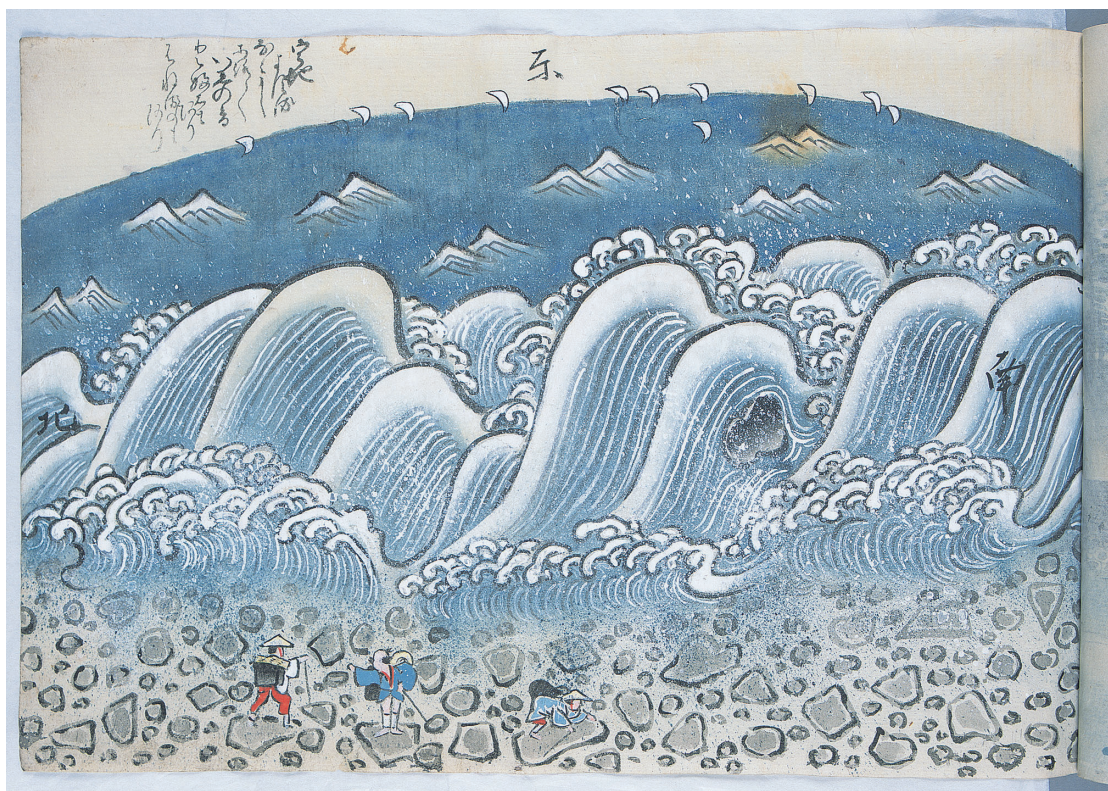


图4 飛石、はね石、ごろごろ石（『中国四国名所旧跡図』）

むの世話でなんとか大頭村の宿に入っていることが記されている。翌二五日には、六一番香苑寺から六四番の前神寺まで参詣し、湯谷の宿に入っているが、徳兵衛はここでついに発作を起こし、気絶したようになっていた。徳兵衛がもし養生が叶わず四国の土となったらと考えると、一同はせつなくて涙が出て止まらなかったとある。せむが前神寺の石鍬山大権現に参り五度心願をこめたことによる仏神の御加護と宿の医師の薬により、徳兵衛は回復し二七日より旅を再開しているが、實際旅の途中で亡くなる遍路も多かったことは、四国各地に残る遍路墓が示すとおりである。

以上、「順拝記」により四国の交通事情を見てきたが、最後に他の遍路の道中日記も用いながら、四国遍路における川と船のことについて触れておきたい。

承応二(一六五三)年の京都智積院の僧澄禅の「四国遍路日記」には、多くの川で橋は勿論のこと渡船も整備されておらず、大河では行き交う船に拌み続けてやっと乗せてもらう有様であったことが記されているが、それから約百五十年後の「順拝記」では、三月二日に逆瀬川を徒歩により渡る際に一部危険な場面があるものの、三月二日の日和佐川、二七日の大川・安田川、四月一日・二日の仁淀川、四日の四万十川など大河においては船渡しが整備されていることを見て取ることができる。しかし、「順拝記」は実際四国のなかに無数あった川のごく一部にしか記述がなく、渡し賃などの記載もない。

「順拝記」とほぼ同時代の文化二(一八〇五)年に、土佐朝倉村の兼太郎が四国遍路した時の記録「四国中道筋日記」には十八カ所の船渡しが記録されている。そのうち土佐が圧倒的に多く十六カ所、阿波と伊予が一カ所ずつとなっており、讃岐には船渡しは見られない。渡し賃は仁淀川河口の渡しが三〇文、四万十川の渡しは十六文とやや高いが、それ以外は二文から八文程度で、伊予の肱川の渡しは無賃となっている。

また、寛政十二(一八〇〇)年の「四国遍礼名所図絵」も川についての記述が詳しく、全体で百カ所を超える川を記録に留めているが、そのなかで「船渡し」「引船渡し」とされているものは二八カ所となっている。土佐が最も多く一カ所、阿波が六カ所、伊予が一カ所であり、先の「四国中道筋日記」の場合

と傾向は変わらない。渡し賃は四万十川が二〇文、那賀川が十五文、大川が十三文で、それ以外の多くは一文から八文程度となっており、一部無賃のものも見られる。「四国遍礼名所図絵」には船渡し以外に「三力所」「土橋」「石橋」「ふし橋」などの橋があったことも記されており、全体として澄禅の時代より交通の整備が進んだ様子を見て取れる。そのことが江戸時代後期の四国遍路熱の高まりを呼んだものと考えられる。

さらに、「順拝記」では船を利用することで、八十八カ所の霊場巡りとどまらず、鳴門の渦潮を見物したり、厳島に参詣することも指摘できる。鳴門の渦潮は、三月十三日に前々日に同宿した備前の人七人と船を借り切り引田を出船、見物を果たしている。厳島については、四月一日に堀江を出船、二十日に厳島の奥院まで参詣後風呂に入り、備前の人同船して再び出船、二三日に大三島神社を参詣して今治に入っている。この厳島への船の旅も徳兵衛一行にとっては大変だったようで、「順拝記」には船中が膝を入れる場所がない程狭く、船は広々と借り切った方がよいと記している。また、大三島に向かう船中は波が烈しく船が沈むのではないかと不安で、高波に揺られてお腹がひっくりかえったみたいで、船の梁にもたれかかって嘔吐したとも記されている。

船による渦潮見物や大三島、厳島参詣は天候によつてはこのような大変な目に会うこともあったが、しかしすべての遍路が楽しめるものでもなかった。他の道中日記のなかで、厳島、大三島を参詣しているものは、「四国遍礼名所図絵」「四国遍路中并接待附万覚帳」の二例で、「順拝記」と同様に鳴門の渦潮見物と厳島参詣を両方とも行っているのは、「西国四国所々泊控帳 参詣所并其外日記 控帳」(以下、「西国四国所々泊帳」とする)のわずか一例を数えるのみである。「西国四国所々泊控帳」によると、鳴門の渦潮見物の船賃は八三文、宮島参詣にいたっては一貫五六〇文となっている。これらは、経済的に余裕のある遍路だけが楽しむことができたものと考えられる。

表1 『四国西国順拝記』にみる宿の記述

月日	場所	現行市町村	名前・屋号	評価	敷物	風呂	ふとん	さいのもの	水	その他
3月8日	国分寺前	高松市						×		
3月9日	仏生寺	高松市	茶や	わひすまひ	畳(あれとも墨を塗りたることく)	壺風呂	×		悪き	
3月10日	志度浦	さぬき市	そばや	よき泊り也						
3月11日	大窪寺の麓	さぬき市			むしろ	×		わらひ茶		
3月12日	引田浦	東かがわ市			畳3帖					
3月13日	霊山寺前	鳴門市								
3月14日	法輪寺前	阿波市		けんどんの亭主				あしく		大にあしく
3月15日	焼山寺麓	神山町			土中丸太の上に板をならべ筵敷き	×	×(紙袋)		2, 3町溪間に汲みに行く	
3月16日	一の宮前	徳島市			むしろ					
3月17日	徳島	徳島市	猪口圃太兵衛					絹の夜具	酒肴	
3月18日	徳島	徳島市	猪口圃太兵衛							
3月19日	鶴村	勝浦町		新宅にてよし	むしろ	×				
3月20日	平等寺麓	阿南市			むしろ		雨合羽	ちじやのしたし物	1町程の河へ取りに参る	専子日々の洗い物
3月21日	ひわさ村(日和佐村)	美波町		よろしき	離座敷		宜敷		沢山洗い物する	
3月22日	めんきやう村	海陽町			古畳	×	×	したしもの・梅干		
3月23日	野子(野根)	東洋町	竹屋町善六	よき宿		×	茶嶋裏ひ色蒲団	宜敷		
3月24日	野子(野根)	東洋町	竹屋町善六							
3月25日	しいな村(椎名村)	室戸市	六左衛門		むしろ	×				
3月26日	羽根郷	室戸市	忠作			×	×			
3月27日	いおき村(伊尾木村)	安芸市		新宅	むしろ(きれい)	×	×			
3月28日	大日寺前	香南市		宜敷泊りなり	畳					庭前に蘇鉄・泉水
3月29日	種崎浦	高知市			古畳	×	紙の大袋			
4月1日	いのしり村(井尻村)	土佐市		悪く	むしろ	×	×			3, 4人入込風呂灯火なし
4月2日	かげ野村(影野村)	四万十町		悪敷	むしろ	×				
4月3日	佐か村(佐賀村)	黒潮町			むしろ	×				
4月4日	正木村(間崎村)	四万十市		あしきことはかりなし						
4月5日	くぼ津浦(窪津浦)	土佐清水市		大二あしく	むしろ	×				
4月6日	いぶり浦(伊布利浦)	土佐清水市		藁屋雨もり古家	むしろ			×		
4月7日	いぶり浦(伊布利浦)	土佐清水市		あはらや						
4月8日	有岡村	四万十市			むしろ	×	×			
4月9日	上辺村(城辺村)	愛南町	仕立ものや					宜敷	悪し	
4月10日	笹山麓	愛南町		大家の一屋						
4月11日	宇和島才木町	宇和島市				寄麗	能			
4月12日	宇野町(卯之町)	西予市		甚々悪敷		×	×	悪し	悪し	むさき事両便所一所

月日	場所	現行市町村	名前・屋号	評価	敷物	風呂	ふとん	さいのもの	水	その他
4月13日	新谷町	大洲市		はな八た寄麗				油上ケのこかね餅		
4月14日	臼杵村	内子町	幾右衛門	悪き事前代未聞也						庄屋よりさし宿
4月15日	畑河村(畑野川村)	久万高原町		悪く						
4月16日	道後湯	松山市								
4月17日	道後湯	松山市								
4月18日	船中									
4月19日	船中									
4月20日	船中									
4月21日	船中									
4月22日	船中									
4月23日	国分寺	今治市		藁屋いふせき裏屋		×	×		悪し	
4月24日	大戸村大藤(大頭村)	西条市			むしろ		×	×		
4月25日	西条湯谷	西条市		能宿				宜敷		
4月26日	西条湯谷	西条市								
4月27日	豊田	四国中央市				×向へ参る	×			
4月28日	佐野	三次市								
4月29日	岡本村	三豊町	平井伊右衛門	善根						
4月30日	おふさ村(大麻村)	善通寺市		宜敷						
5月1日	丸亀	丸亀市								

現行市町村名は2006年3月現在

(四) 食事・宿と経費

食事については、「順拝記」第三巻の前書に次のように記されている。

食事といへは四国にては七ツ半二泊りては夕朝食迄弁当迄もたき置、朝飯さいなく胸塞りけるとて吃ざりければ、冷飯を茶漬にて流し込、西国順路の道までも四五十日は空豆切干大根而已にて、漸々熊野路にて浅瓜を菜に求む事なり

旅中は七ツ半(午後五時頃)に宿に入り、夕飯だけでなく翌日の朝食と昼食の分の御飯も炊いておいたことが記されている。朝飯は御飯だけで菜(副食)がなく、胸につかえるため冷や飯を茶漬けにして流し込むことが多かった。米は旅先で購入するのがほとんどで、「順拝記」にはその土地の庄屋から米を買い求めた記述も見える。これは当時四国の宿のほとんどが木賃宿で、毎日のように米を買い、自炊しなければならなかったからである。こうした自炊は、女性のせむの仕事とされていたようで、せむが足の痛みも厭わず御飯を炊きに行く記述も見える。

旅中の副食は、空豆・切り干し大根が多かったようで、熊野路では浅瓜を買い求めている。ただし、副食は必ずしも毎日ではなかったようで、日記には「さいなし」という記述も多く見ることができる。また、途中で善根でもらったり、購入した「香物」や「長なすびの味噌づけ」などをできるだけ持ち歩き、旅先の乏しい食事を補っていた。

また宿についてはその概要を表1に示した。筵敷きか畳敷きかということ、風呂・ふとん・さいのもの(副食)の有無、水がきれいで近場にあるかといったことが、旅人にとって宿を評価する基準になっていた様子がうかがえる。まず敷物から見ると、泊まった宿のほとんどが当時筵敷きで、たとえ畳があったとしても古畳や墨をぬったような汚れた畳であったことが記されている。はなはだしい場合は、土に置かれた丸太の上に板をならべて敷き、その上に筵を敷くということもあった。風呂については現在の高松市から徳島市にかけて

の宿については多く見られるが、徳島市を過ぎたあたりから高知市にかけてはほとんど風呂が無く、二、三町程離れたところまで風呂を貰いに出かけることもあった。またふとがない宿も多く、そうした場合携帯している紙袋により寒さを凌いだという記述もある。この紙袋とは厚紙に柿渋を塗り何度も揉んでやわらかにした紙袋のことで、軽くて保温に優れ、蒲団のかわりにもなるし、また雨の際の合羽がわりにもなった。それ以外に蚊を防ぐための紙の蚊帳も持ち歩いてた。副食の菜のものは先程述べたようにないことも多かった。それから宿の水まわりについては水の善し悪しなどが記されるほか、なかには二、三町離れた谷間や川まで水を汲みにいかなければならない宿もあり、洗濯に苦労している様子も記されている。

「順拝記」からは、五街道のように整備された宿場町の宿とは異なり、四国遍路の宿がかなり劣悪な環境にあったことがうかがえる。特に土佐の全般と伊予の四四番大宝寺と四五番の岩屋寺あたりの宿についてはそうした傾向が強かった。また、三月二十日と四月二十九日の接待による宿泊以外は木賃宿であったと思われるが、そのほとんどは名前を書き留めておらず、宿代なども不明である。そこで、ここではいくつかの道中日記を取り上げ、四国遍路の宿の問題についてさらに考察を深めたい。

まず、最も古い承応二（一六五三）年の澄禅の「四国遍路日記」には、四国では九十日分の宿が記載されているが、その内訳は寺院が六一日、民家が二十日、無料宿泊所である遍路屋が二日、記載がなく不明であるが民家と思われるものが七日となっている。澄禅自身が真言宗の僧であるので、高野山での旧友の寺院や札所寺院に泊まることが多いが、一部浄土宗・浄土真宗の寺院や山伏の家にも宿泊している。一方民家の宿泊も若干はあるが、「遍路モ数度シタル人」というように遍路に深い関わりをもつ民家であり、「順拝記」に登場するような木賃宿が整備されているという状況には程遠い。そうした状況を補っていたのが、澄禅も泊まった遍路屋であった。澄禅は八月五日に土佐野根の大師堂、十月十日に讃岐弥谷のふもとの遍路屋という二つの遍路屋に泊まっているが、それ以外にも当時阿波海部の大師堂、阿波穴喰の遍路屋、伊予宇和島追手門外

にあった大師堂、阿波佐野の遍路屋といった四つの遍路屋があったことを道中日記に書き留めている。その後元禄頃まで各地に遍路屋やそれに準ずる施設が設置されていったといわれるが、それらは木賃宿などの宿泊設備が整っていない時期の遍路の宿として利用されていたものと思われる。

次いで延享四（一七四七）年の讃岐井関村佐伯藤兵衛の「四国辺路中万覚日記」では、ほとんど毎日米を購入し、六文から八文の「木賃」、木賃水風呂代共「で十二文といった木賃宿に宿泊している。また、木賃の記載がない日も半数近くあり、そのなかには無料の善根宿も多く含まれているものと思われる。澄禅の日記にみられた遍路屋も、藤兵衛の同行の喜四郎が高知城下で足を痛めた際に登場しているが、そこが「殊之外ふきれい」なためすぐに別の宿に移っている。この頃より一般の遍路にとつて遍路屋は次第に敬遠されるようになっていったものと思われる。

伊予上野村庄屋の玉井元之進の寛政七（一七九五）年の「四国中諸日記」では接待の善根宿は見あたらず、五人で木賃三〇文・六五文・一〇〇文などであることから計算すると、一人当たり六文・十三文・二〇文程度の木賃宿に泊まっている。「順拝記」とほぼ同時期の文化二（一八〇五）年に遍路を行った土佐朝倉村の兼太郎の「四国中道筋日記」は、「木賃なし」の記述もあり、接待も受けながらの旅であったと思われるが、木賃を支払っているところでは六文から十二文が多く、最も高い大洲城下、久万、道後などの町場でも十五文となっている。時代がやや下つた天保十三（一八四二）年に、駿河国大御神村の天野文左衛門が西国順礼と四国遍路を行った際の「西国四国所々泊控帳」には、若干の施行宿つまりは接待の善根宿があるが、八〜二〇〇文の宿に泊まっている。天野の場合は、他の遍路と違い木賃宿は使わずに旅籠に泊まった可能性が高い。天野を除く道中日記には毎日のように米を購入する記述があるが、そこからは、江戸時代後期四国内に木賃宿が整備され、木賃宿と接待の善根宿を組み合わせた泊まり歩く遍路のスタイルが一般的になっていることがうかがえる。一方、遍路屋はこの時期のほとんどの道中日記から宿泊場所としては姿を消し、文政二（一八一九）年四月十日に土佐長山村新井頼助が阿波高梁村宿泊した大

師堂が遍路屋であったことが数少ない事例としてあげられるが、この場合もその大師堂が「至而奇麗なるゆへ」と特別な理由があったことを頼助は書き足している。

以上、他の道中日記から宿の問題を見てきたが、これらの事例から、おそらく「順拝記」の一行も同時期の他の道中日記の作者と同じく木賃宿を用いながら四国を廻っていたものと考えられる。しかし、道中日記は、江戸時代後期四国のなかに全体としてどれくらいの数の木賃宿があったのかということについては、何も語ってくれない。そこで、それを補う意味で、最後に『四国八十八ヶ所大坂永代笠講宿泊附』(以下、『宿泊附』とする)を取り上げる。

タイトルにある永代笠講は、四国遍路をめぐる旅宿組合に当たるものである。こうした旅宿組合としては、文化元(一八〇四)年に五街道を中心に浪花組として創設され、天保十二(一八四一)年に改称した浪花講が有名であるが、永代笠講はその四国版にあたる旅宿組合といえる。『宿附帳』は持ち運びに便利な縦七、三センチ、横一六、〇センチの小横帳となっており、浪花講の帳面である『浪花講定宿帳』と体裁・書式ともによく似ている。このことから、永代笠講は浪花講をモデルとして作られており、浪花講よりも時代が下る幕末期の成立を想定することができる。巻末には、講元の御池橋東詰南入の美濃屋太兵衛をはじめ、世話方として二十七名の大坂商人が名前を連ねており、大坂から四国に向かう遍路のために板行されたものであることが分かる。

本文には、まず最初に大坂永代笠講の目印について記載があり、その看板の目印が付いた宿には講員は七ツ時(午後四時頃)より泊まることできること、が付いた宿は上宿であることが記されている。次に「四国霊場道しるべ」と題し、四国を巡拝する人が宿をとりうしなうことが多いため、美濃屋太兵衛が有徳の人々と協力してこの案内書を板行したという板行に至る動機が記されている。さらに、大坂からの金毘羅渡海船の出船所として、講船宿の大坂日本橋北詰東入、きし沢屋弥吉の名前と船の帆印が記され、丸亀までの海上里数、丸亀上陸後の船問屋、笠講の定宿、諸品買物所についても記されている。そして、丸亀に一番近い札所の七八番の道場寺から七七番札所の道隆寺まで順番に、札

所と札所の間で通過する主な村の名前と距離、宿の名前と宿代、その他川や道標、国境の番所の位置などが示されている。永代笠講に加盟している宿という限定はつくが、四国全体の木賃宿についてうかがえる数少ない貴重な史料といえる。

試みに『宿附帳』に登場する宿を表にまとめてみると、表2のようになる。そこからは遍路道沿いに二七五カ所の宿泊場所のデータを拾い出すことができる。宿の種類は旅籠・木賃宿・堂庵に分けられる。旅籠は食事付の宿で宿代が一四〇文から一八〇文と高いが、五街道とは異なり宇多津・徳島・西条氷見・観音寺といった城下町や在町の四カ所にしかない。木賃を記したものを木賃宿と考えると、木賃宿が最も多く二二四カ所がこれに該当する¹³⁾。木賃は一五文から六〇文までとばらつきがあるが、四〇文以上の宿が圧倒的に多い。二〇文以下の宿は地域的には土佐の西部から伊予の南部に集中している。いずれにせよ、道中記を書き残した遍路の泊まるほとんどの宿がこのタイプの宿であり、遍路道をほぼ覆う形で成立していたことがうかがえる。それ以外に、燈明銭という形で宿代を支払う堂庵も三六カ所認められる。これら堂庵は、無賃か一二文から二〇文程度で宿泊できるようにしており、木賃宿よりも廉価になっている。その多くは、遍路道沿いの村の堂庵であったが、讃岐原村の落合真念庵と土佐市の瀬の七里庵など、『四国遍路功德記』に記されている真念が遍路のために各地に設けた遍路屋の系譜をひくものもあつた。また、阿波柳の水庵は、明和四年の『四国遍礼道指南増補大成』に記されている柳の水の遍路屋と同一のものと思われる。こうした村の堂庵や遍路屋の系譜をひく堂庵が木賃宿に比べて安い宿代で遍路に開かれていたことの意味は大きいものと考えられる。先に道中日記の宿泊先を見たなかで、遍路屋やそれに準ずる堂庵への宿泊がほとんど見られないことを指摘したが、その際に道中日記を書いている大部分が庄屋など上層農民であることに注意する必要がある¹⁴⁾。つまり、こうした堂庵は、道中日記を遺さないような下層農民にこそ利用されるところが大きかったのでないかと考えられる。だからこそ、『宿泊附』にいたっても依然としてこれだけの数の堂庵が記されているともいえる。江戸時代後期から幕末期にかけて、遍路道

を覆う木賃宿の整備と開かれた堂庵という二つの要素があつてはじめて、上層下層を問わず多くの遍路が四国を訪れることが可能となった。

(五) 接待

「順拝記」には、他の道中日記と同様に「善根」という言葉で各地で行われた接待についても記されている。それを一通り示すと次のようなものがある。

四国遍路を始めた日の三月八日に、早速七八番の道場寺において、餅三個・草鞋一足・油元結・香物・飯を一人前として人数分の四人前の施物を受けている。翌四日にも、八二番の根来寺に向かう道すがら大きな民家で、飯・茶・したしものなどの昼食の接待を受けている。

三月十四日には場所は不明であるが、寺僧より善根で宿を勧められているが、この時弥四郎と荷物人が既に二、三百メートル程先を行ってしまっていたので、それを断っている。十七日にはせむが徳島城下で油元結を買い求めていると、ある家から呼びかけられて香物を十本もらっている。この香物は上々の味で重宝したと「順拝記」には記している。同日清見山金毘羅大権現においても施食を受けている。

三月二十日には、二二番の平等寺のふもとで宿の接待を受けているが、湯をたきしたしものなどももらったので、醤油代として十銅(十文)を置いている。その後土佐に入ると、接待の記述は登場しなくなる。土佐において遍路の規制が厳しかったことは先に記したが、その影響であろうか。四月九日に三九番の寺山寺を参詣後、土佐伊予国境の山道で、土佐で散々苦労したため土佐領に少しでも入るとぞっとすると記してあるのも遍路にとっての土佐の厳しさを物語るものと考えられる。十一日にも土佐伊予国境の山道を歩いているが、この時も高知藩十一代藩主山内豊興が亡くなったことにもなう触れが出ていたためか、土佐藩領の村々は戸を閉ざして昼食や休憩の場所に困っている。しかし、この時にはよい人にめぐりあい、なんとか食物を求めることができ、飢えを凌いでいる。

伊予においても接待の記述はないが、次に接待の記述が現れるのは四月二九

日の讃岐に入ってからである。徳兵衛一行はこの日、本山寺参詣後宿を求めようとしているが、日蓮宗が多くなかなか宿を借りることができないなか、岡本村の平井右衛門が善根で一行に宿を提供している。四国遍路の最終日の五月朔日にも七七番の道隆寺で酒食など様々な接待が行われていたことを記しているが、西国巡礼の旅を控えている一行は接待を受けず丸亀に急いでいる。

以上が「順拝記」にみる接待の記述であるが、接待には札所でのものと個人から受ける接待があつたようである。遍路は泊まる宿や昼食、持ち歩く漬け物など様々な接待を受けていた様子が分かる。「順拝記」がすべての接待を記録しているとは限らないが、数自体はそれほど多いとはいえない。他の道中日記をみると、寛政七(一七九五)年の「四国中諸日記」にはほとんど接待は記録されていないが、文化二(一八〇五)年の「四国中道筋日記」には十七回、文政二(一八一九)年の「四国順拝日記」には十二回、天保四(一八三三)年の「四国順礼道中記録」には六九回、天保七(一八三六)年の「四国遍路中并撰待附万覚帳」には五〇回、天保十三年の「西国四国所々泊帳」には三二回の接待がそれぞれ記録されている。このうち、「四国順拝日記」では接待を受けた回数こそ少ないが、六四番前神寺と六五番三角寺の間に十一万所もめし・銭・月代剃り・わらづ(草鞋)を接待する所があつたこと、七〇番本山寺から七一番弥谷寺にかけても接待に出る人が多く十八カ所接待が行われていたことを書き残している。そのことと天保期の道中日記に接待が多く記録されていることを考えあわせると、特に化政期から天保期にかけて接待が盛んになっていったものと思われる。そして、道中日記を書き残している人物は庄屋などの上層農民が多いが、接待はそうでない下層農民こそ恩恵に蒙るところが大きかつたものと考えられる。江戸時代の四国遍路熱の高まりはこうした接待により支えられ、その一方でいわゆる乞食遍路や偽遍路の横行をもたらしただのである。

表2 『四国八十八ヶ所大坂永代笠講宿泊附』に見る宿

地名	現行市町村名	記号	宿名	旅籠銭	木銭	燈明銭	備考
宇是津(宇多津)	宇多津町		玉や勝蔵	140文	50文		
八十八水	坂出市		高宮熊蔵		50文		此処名水也
高や村(高屋)	坂出市		林内		50文		
白峯寺礼所まへ	坂出市		高を屋林蔵		50文		
名上峯	高松市		常蔵		50文		ぢぞう前
名上峯	高松市		あん				
国分むら	高松市		辰巳や傳次郎		50文		札所より一丁東
新名むら	高松市		藤十郎		50文		
一の宮	高松市		三村や治兵へ		50文		門前より一丁右
佛生山まち	高松市		池田や五郎兵へ		50文		
元山村	高松市		万福庵			15銅	
春日川	高松市		光明庵			15銅	
八島ふもと	高松市		さくら庵			20文	
だんの浦(壇の浦)	高松市		撰待あん			15銅	
やぐり禁(八栗)	高松市		折や幸右衛門		15文		
はら村(原)	高松市		落合真念あん			15銅	
志度寺門前まへ	さぬき市		高松や伊八		50文		
志度村	さぬき市		小阪あん			15銅	
長尾寺門前まへ	さぬき市		米屋藤吉		50文		
西塚原	さぬき市		一心あん			15銅	
西塚原	さぬき市		ぢぞうあん			15銅	
前山むら	さぬき市		一ノ坂弥介		50文		
前山むら	さぬき市		花折あん			12銅	
前山むら峠	さぬき市		劔蔵		50文		
がくむら(額)	さぬき市		さつまや和作		50文		
大窪寺門前まへ	さぬき市		四郎治		50文		
五名村	東かがわ市		土浦堂あん				
大影村	阿波市		銀杏や治兵へ		50文		
かしの木			善兵へ		50文		
白鳥	東かがわ市		とさや文七		60文		右角
いさ村(伊座)	東かがわ市		川崎や傳七		50文		
いさ村(伊座)	東かがわ市		森権平様庵			12銅	
ひけた(引田)	東かがわ市		前川や金蔵		50文		
いせき(井関)	東かがわ市		はし本や新兵へ		50文		
いせき(井関)	東かがわ市		森本や林蔵		50文		
国堺峠			文蔵				比處大師堂あり
阿波国番所前	板野町		中嶋や嘉右衛門		50文		
金泉寺まへ	板野町		高嶋や佐介		50文		
松谷村	板野町		あいぜん庵			12銅	三番札所より二十丁
黒谷村	板野町		山崎や卯兵衛		50文		
ぢぞうじまへ	板野町		大こくや紋平		50文		
安楽寺まへ	上板町		富や儀兵へ		50文		
吉田むら	阿波市		車や伊右衛門		50文		
熊谷寺門前まへ右が八	阿波市		大和屋忠蔵		50文		
法輪寺門前まへ	阿波市		三木や廉治		50文		
切ばた村(切幡)	阿波市		ふじや虎吉		50文		
切ばた村(切幡)	阿波市		油や兵蔵		50文		
藤井寺礼所まへ	吉野川市		ふしやいせ吉・谷や伊九郎		50文		
藤井寺	吉野川市		長戸庵			12銅	
長戸庵			磯見や太助		55文		

地名	現行市町村名	記号	宿名	旅籠銭	木銭	燈明銭	備考
柳の水	神山町・美郷村		あん			次13銅、 上20銅	
一本杉	神山町		あん			12銅	
左右内村	神山町		岡田や仙太郎		50文		
焼山寺門前まへ	神山町		みよしや政之丞				此所七ツ時 <small>ろ</small> 宿仕る
右衛門杉	神山町		あん			12銅	
玉形尾	神山町		あん				
入田むら	神山町		穴田民蔵		50文		
一の宮とりいまへ	徳島市		柏や喜三太		60文		
圓命村	徳島市		西上や徳太郎		50文		
国分寺札所前	徳島市		豊住や嘉右門		50文		
観音寺むら	徳島市		大坂や新右衛門		50文		
伊戸寺門前まへ	徳島市		大松や理兵へ		50文		
徳しま	徳島市		扇子や喜兵へ	180文	50文		さこ町十一丁目
江田むら	小松島市		せつたい庵			18文	
前原むら	小松島市		しまや光太		50文		
立江村	小松島市		板や綱吉		50文		
櫛淵村	小松島市		中や実太郎		50文		
櫛淵村	小松島市		長門や京次郎		50文		
ぬ糸村(沼江)	勝浦町		佐太郎		50文		
中角村	勝浦町		亀や瀧右衛門		50文		
棚の村	勝浦町		鶴や重右衛門		50文		
大井むら	阿南市		柳や与一郎		50文		
あせへ村(阿瀬比)	阿南市		半次郎		50文		
大年坂	阿南市		山口屋長蔵		40文		
大年坂	阿南市		ぢぞうあん			12銅	
荒棚むら馬場	阿南市		大谷や久吉		50文		
荒棚むら	阿南市		さくらあん			12文	
かね内	阿南市		はし本や吉蔵		50文		
小野むら	阿南市		松本や利吉		50文		
大戸むら	美波町		じぞうあん			15文	
大戸むら	美波町		喜兵衛		50文		
大戸むら	美波町		政蔵		50文		
ふかせ村(深瀬)	美波町		とめ岡や彦右衛門		50文		
ふかせ村(深瀬)	美波町		あがや三木蔵		50文		
日和佐浦	美波町		はし本や治郎右衛門		50文		
薬王寺札所下	美波町		茶所			12文	
薬王寺札所下	美波町		こんとや熊吉		50文		
片むら	美波町		はりまや又右衛門		45文		
片むら	美波町		定蔵		45文		
山河内村	美波町		赤松や直兵衛		50文		
とんく			いせや丹右衛門		45文		
小まつ			ぢぞう庵			12文	
川内村(河内)	牟岐町		布袋や和右衛門		50文		
麦の町(牟岐)	牟岐町		花や喜太郎		50文		
八坂八浜	海陽町		さばせあん			12文	
あさか村(浅川)	海陽町		いせたや甚介		50文		
いな村	海陽町		新や孫右衛門		50文		
西教村	海陽町		山下や清蔵		50文		
たらん村(多良)	海陽町		太次右衛門		50文		
高その村(高園)	海陽町		麦や兵七		50文		

地名	現行市町村名	記号	宿名	旅籠銭	木銭	燈明銭	備考
馬路坂	海陽町		あん			12文	
し々くい(宍喰)	海陽町		榭や八十平		50文		
相間	東洋町		あん			12文	
のね浦(野根)	東洋町		よしのや茂右衛門				
飛ひ石	室戸市		法海あん				
飛ひ石	室戸市		おびや平吉		50文		
飛ひ石	室戸市		仏海あん			15文	
先の浜(佐喜浜)	室戸市		高岡屋清助		50文		
椎名むら	室戸市		中や伴介		50文		
みつ浦(三津)	室戸市		中や甚介		50文		
坂本村	室戸市		松や龍太郎		50文		
つる浦(津呂)	室戸市		福吉や竹三郎		50文		
納経場	室戸市		ふじや為之丞		50文		
元浦	室戸市		久保や虎助		50文		
黒耳村	室戸市		茶や重介		50文		(西寺)本堂の八丁下
吉良川	室戸市		しまや村平		50文		
羽子浦(羽根)	室戸市		安田や半五郎		50文		
名半利うら(奈半利)	奈半利町		松吉や覚蔵		50文		
田の浦(田野)	田野町		米や弥兵衛		50文		
神峯寺ふもと	安田町		岡田や忠五右衛門		50文		
下山むら	安芸市		坂本や長吉		50文		
川のむら(河野)	安芸市		松本や長介		50文		
いをき(伊尾木)	安芸市		丸吉や仙之丞		50文		
新上浜	安芸市		大こくや彦右衛門		45文		
穴内むら	安芸市		辰蔵		50文		
穴内むら	安芸市		湊や亀太郎		50文		
赤の浦(赤野)	安芸市		万徳や佐介		50文		
西わしき(和食)	芸西村		ふくしまや虎八		50文		
三げんや			いづみや与右衛門		50文		
赤岡出口	香南市		はし本や吉平		50文		
大日寺礼所まへ	香南市		坂本や鉄平		50文		
国分寺礼所まへ	南国市		のとや治右衛門		50文		
五台山礼所 ^の 先	高知市		亀八		18文		
十一むら			大道や吉平		50文		
禅師峯寺礼所 ^の 先	南国市		中や銀之助		60文		
種崎浦	高知市		しまや辰蔵		50文		
高福寺礼所まへ	高知市		さくらや亀吉		50文		
種間寺礼所まへ	春野町		友治		18文		
高岡入口	土佐市		中屋百蔵		50文		
つかじ村(塚地)	土佐市		茂右衛門		50文		
いのしり浦(井尻)	土佐市		くれや源太郎		50文		
横なミ(横浪)	須崎市		甚介		50文		上りば ^の 三丁
ごめん町(後免)	南国市		龍右衛門		20文		
すさき町入口(須崎)	須崎市		ふなや文二郎		50文		
あわむら(安和)	須崎市		茶や重平		50文		
床鍋	四万十町		おくま		16文		
かけのむら(影野)	四万十町		山田や勇平		50文		
六だんじ村(六反地)	四万十町		とがのや万平		50文		
柿木山	四万十町		福嶋や丈平		50文		
仁井田五社礼所まへ	四万十町		高岡や寿八		45文		
久保川(窪川)	四万十町		北屋増右衛門		50文		

地名	現行市町村名	記号	宿名	旅籠銭	木銭	燈明銭	備考
むねの上(峰の上)	四万十町・黒瀬町		いせや助次		50文		
こぼし川(拳川)	黒潮町		かぢや又作		50文		
ふわら川(不破原)	黒潮町		万や竹治		50文		
さかの浦(佐賀)	黒潮町		角や久兵へ		50文		
しら浜(白浜)	黒潮町		大こくや竹蔵		50文		
いた浦(井田)	黒潮町		みどりや寿平		50文		
おきつ浦(興津)	四万十町		花や八百作		50文		
入の新町(入野)	黒潮町		あわや唯七		50文		
天満	黒潮町		山田や喜三郎		50文		
つくら淵(津蔵淵)	四万十市		小松や七兵へ		50文		
つくら淵(津蔵淵)	四万十市		あん			12文	
市の瀬(市野瀬)	土佐清水市		七里あん				
市の野(市野々)	土佐清水市		岩平		50文		
久もゝ(久百々)	土佐清水市		喜代蔵		16文		
大木村(大岐)	土佐清水市		悦平		16文		
大木村(大岐)	土佐清水市		玉や政次郎		56文		
久保津(窪津)	土佐清水市		岡村や嘉兵へ		16文		
津ろ浦(津呂)	土佐清水市		岡崎源之進		16文		
いさ浦(伊佐)	土佐清水市		和田や弁次		50文		
足摺山札所まへ	土佐清水市		永蔵		16文		
上長谷	三原村		保右衛門		50文		
江の村	四万十市		みとりや長平		18文		
有岡村	四万十市		新や鎌介		50文		
平田むら	宿毛市		三柘や伊之助		50文		
寺山札所まへ	宿毛市		川嶋や惣平		60文		
市山村	宿毛市		榎木や徳治		50文		
宿毛町	宿毛市		さゝや仲之介		16文		
ひろ三村(広見)	愛南町		政治		18文		
常へん村(城辺)	愛南町		國蔵		16文		
観自在寺札所まへ	愛南町		福柘や市太郎		16文		
菊川むら	愛南町		木や為蔵		16文		
上畑地村	宇和島市		常次郎		15文		
下畑地村	宇和島市		徳三郎		16文		
高田村	宇和島市		善吉		15文		
柿ノ木村	宇和島市		喜三郎		50文		
悦森村	宇和島市		濱田や忠治		15文		祝森力
松がはな(松ガ鼻)	宇和島市		松や浅之進		15文		
高くし村(高串)	宇和島市		たゝみや音松		15文		
光満村	宇和島市		とがりや重蔵		16文		
稲荷札所まへ	宇和島市		庄太郎		16文		
砂わち村(則)	宇和島市		よのミや与平		16文		
砂わち村(則)	宇和島市		坂本や福松		16文		
下川むら	西予市		法花津や紋二郎		18文		
下川むら	西予市		ぢぞうあん			12文	
明石寺札所茶所	西予市					15銅	
卯の町	西予市		備中屋柳介		18文		萬かけ物所
東多田	西予市		あん			15文	
東多田	西予市		米や利右衛門		16文		
とさか(鳥坂)	西予市		小田屋浦太郎		16文		
札かけ	大洲市		あん				

地名	現行市町村名	記号	宿名	旅籠銭	木銭	燈明銭	備考
札かけ	大洲市		坂中仲右衛門		20文		
大洲城下入口	大洲市		松かや儀兵へ		60文		
都谷の橋	大洲市		大師堂あり				此所大師野宿の所也
にいや町(新谷)	大洲市		中や与兵へ		18文		かつば所
内の子町入口	内子町		よしや弥太郎		60文		
和田	内子町		亀吉		16文		大瀬谷五十丁
なるや	内子町		そねや竹二郎		50文		大瀬谷三十六丁
川のぼり(川登)	内子町		枅や仲介		20文		
よしの川(吉野川)	内子町		吉田や弥右衛門		18文		
中太田	内子町		河内や佐市		18文		
倉谷	内子町		杉本や豊太郎		15文		
二名村	久万高原町		嶋や源助		15文		
熊の町入口(久万)	久万高原町		大こくや卯太蔵		20文		
はたの川(畑野川)	久万高原町		角や伝蔵		60文		
東明神	久万高原町		法雲庵			12銅	
三阪峠	久万高原町		壺軒茶屋				
桜安ば(桜休場)	松山市		鎌治		15文		
久谷村	松山市		上野や重介		18文		
上野村	松山市		天王寺や文作		60文		
西林寺礼所まへ	松山市		戎や孫平		50文		
どうご入口(道後)	松山市		いづゝ屋仙介		60文		
太山寺むら	松山市		ふじや弥作		50文		
ほり江(堀江)	松山市		善右衛門				
あわい坂(粟井坂)	松山市		あん			12文	
柳原	松山市		茶や仲蔵		50文		
ほう条(北条)	松山市		拝志や治兵へ		50文		
あさ浪(浅海)	松山市		わたや重蔵		16文		
菊間	今治市		井戸や和吉		16文		
さが田(佐方)	今治市		木屋保兵へ		60文		
大井新町	今治市		三かさや伴次		60文		
日吉村	今治市		嘉兵へ		20文		
馬ごへ村(馬越)	今治市		新屋菊二郎		60文		
上新宮(上神宮)	今治市		大坂や幸蔵		60文		
国分寺礼所まへ	今治市		のぼりや安介		50文		
桜井村	今治市		川崎や林蔵		50文		
長沢むら	今治市		吉木や紋蔵		18文		
長沢むら	今治市		あん			12文	
六けん茶や(六軒屋)	東予市		長門や嘉兵衛		50文		
臼井の水	東予市		備前や喜代介		50文		
北しん町(新町)	西条市		油や平兵へ		60文		
丹原	西条市		あめや定右衛門		20文		
大戸町(大頭)	西条市		今井や鶴蔵		18文		
小松城下	西条市		今ばりや長兵へ				
吉祥寺礼所ゝ一丁	西条市		松屋源助	140文	60文		
前神寺礼所まへ	西条市		辻本屋やく蔵		15文		
西條大町	西条市		天満や定蔵		60文		
野口むら	新居浜市		友鶴		50文		
岸の下	新居浜市		松尾や弥兵へ		50文		
すみの村(角野)	新居浜市		角やつる次		60文		
舟木村	新居浜市		濱や六右衛門		50文		
関の戸	新居浜市		大和や鉄蔵		60文		

地名	現行市町村名	記号	宿名	旅籠銭	木銭	燈明銭	備考
木の川村	四国中央市		はし本や角助		50文		
土井むら(土居)	四国中央市		さぬきや長四郎		15文		
土井むら(土居)	四国中央市		あん				
津ね村(津根)	四国中央市		阿八や文右衛門		50文		
豊田村(豊岡)	四国中央市		東や休兵衛		50文		
さん川村(寒川)	四国中央市		土佐やいせ蔵		50文		
中の庄	四国中央市		油や兵吉		50文		
中の庄	四国中央市		あん			12文	
平山村	四国中央市		泉や武右衛門		60文		
平山村	四国中央市		あん			12文	
平山村	四国中央市		あめや安兵へ		20文		
椿堂	四国中央市		中や八百蔵		50文		
立石			古や孫右衛門		50文		
さの(佐野)	三好市		末廣や吉右衛門		50文		
雲辺寺ふもと	三好市		あん			15文	
粟井村	観音寺市		土仏辻あん			15文	
辻村	山本町		平野や丈吉		50文		
観音寺	観音寺市		角や弥吉	170文	60文		
観音寺札所まへ	観音寺市		金や孫七		50文		
新名村	高瀬町		松本や竹蔵		60文		
弥谷寺札所まへ	三豊市		ふじ本や佐兵へ		50文		
出釈寺札所まへ	善通寺市		角や文吉		50文		
善通寺札所まへ	善通寺市		内田や甚右衛門				

現行市町村名は2006年3月現在

四、おわりに

以上、「順拝記」を中心に、他の道中日記も合わせて検討していくなかで、装束や荷物、食事や宿・四国の交通事情・接待など江戸時代の四国遍路の実像に迫ったが、最後にこの「順拝記」について、これまで触れていないことで特に気になることを記しておきたい。

それはこの「順拝記」は旅行しながら書き留めた旅中での道中日記とは異なり、旅の後に内容を吟味推敲して記された道中日記であるということである。そのことは、「順拝記」第三巻がまず最初に序文があり、それから日記に入っていくという整った構成であること、また以前史料翻刻に掲載したように本文が仮名交じり文でルビが入る形で書かれていることなどに示されており、当時の出版物の構成・体裁によく似ている。

「順拝記」が多くの人に読まれることを前提にしていたことは、第三巻の序文にある次のような文章にもうかがえる。

切京都大坂は四国順礼八とかくに病人斗也、中国四国九州の参詣人ハ美々敷衣裳にて参詣人夥し事也、愚毫の重言書ならへたるハ恥しきなれとも、有の俣を書まいらす而已にて後々の御笑草にもなれかしと存し

京都大坂からの四国遍路は病人ばかりで、中国四国九州の参詣人は美しい衣裳を着ているという対比が記されており、関西方面の旅人の旅への意識に踏み込んだ記述があり興味深い。ここにはこれから後の京都大坂からの遍路のために書き残そうとする姿勢が明確に示されている。

この「順拝記」の刊行が意図された江戸時代後期は、京都大坂を中心とした関西において四国遍路熱が高まった時期といえる。まず宝暦十三(一七六三)年には細田周英が四国八十八ヶ所の札所の位置や遍路道などを示した「四国徧礼絵図」が心齋橋の柏原屋清右衛門・与市に、順慶町壱丁目の田原屋平兵衛を加えた大坂の三人の書林より刊行されている。「順拝記」の第一巻にも多く引用



図5 太龍窟 (『中国四国名所跡図』)

されている『四国遍路道指南』も、この時期増補大成として版を重ねるとともに、その海賊版に当たるものまで現れており、関西方面で広く利用されていることがうかがえる。また、先に記した四国遍路版の旅館組合である永代笠講が大坂に設けられているのも、関西における四国遍路熱の高まりを示すものといえよう。このように関西において江戸時代後期、四国遍路の旅が注目されるなかで、京都の人間が四国遍路に出るといふ設定で「順拝記」の刊行が意図されたのではないかと考えられる。また、そこにせむという女性遍路を加えて生き生きとした叙述がされているのも、当時の女性遍路の増加をその背景に考えることができる。例えば、二一番札所太龍寺の奥院太龍窟について次のような記述がある。

太龍寺の奥院岩窟の坂道烈敷事八四国第一の開地二而深山幽谷溪水遠く樹をへ石高きこと言葉にも述がたく、巖窟山の奥に有女人八禁す、此所に専子壱人にて荷物を守ること、但壱人故気得なれ共、弥四郎殿病氣祈る故我等三人穴へ参るなり、其恐き岩穴やう先々に参詣相済悦入なり

松浦武四郎は、この太龍窟の前には本尊弘法大師の尊像と不動尊が安置された庵があり、十二文で案内人がつき、この石窟に入るには松明を灯したと記しているが、その様子は「中国四国名所旧跡図」にも描写されている(図5)。石窟は女人禁制であり、せむは山には入らず一人で荷物を守る間に残りの三人は参詣を行っている。このあたりの記述は、女性の遍路の増加とともに女人禁制などの情報を伝えるためには、登場人物に女性を加える必要があったと読み取ることも可能である。¹⁸⁾

「順拝記」を刊行を意図したのもう一度見直すと、せむの人間造形などフィクションと思える点も見えてくる。その一方で、実際四国を旅した人でないと書けない部分があることも確かである。その例として、「順拝記」の四月一四日の部分をあげることができる。

四月十四日、天気、伊豫菅生山迄出る道なり、九里はかり歩ミ、八里か間谷底中央谷河山道左右に離れく、山田人家ありといへとも甚悪き人家、宿頼むといへともかし呉られず、甚々めいわく致し、すな八白杵村幾右衛門方へ宿す、庄よりさし宿なり、此処朝暮なんばの粉を食入、悪き事前代未聞也、参詣の人々菅生山迄出るかよし、前日に宿考置へし、月はれ渡り山河有て、幽谷の地月を見てこゝろを慰めけり、此所の食物は朝暮なんばきびの粉を食し、昼は麩食を食ふていなり、八里か間八石臼のおと高きこと夥し

この日、徳兵衛一行は新谷を出発し大洲街道を進んだ後、内子より大洲街道を離れ、四四番の大宝寺を目指し遍路道を進んでいる。この遍路道は中央の谷川（小田川）に沿った谷底の道であり、辺りにはあまり裕福とはいえない民家が散在していた。木賃宿もなかったようで、白杵村の庄屋に頼み、その指示でようやく宿を見つけている。そして、遍路道沿いの地域では、朝暮ともになんばきび（とうもろこし）を食しているため、歩いている間は石臼の音が絶えなかったことが驚きとともに記されている。

ところで、この地域でなんばきびを食していたことは、大洲藩の郡奉行の井口亦八が書いた『農家業状筆録』⁽¹⁰⁾にも記されている。大洲藩の山奥の食生活について書いた部分に次のようにある。

年始三日すぎぬれば、あさとはんはちらしとて麦にとつきひをいり、磨にてひき粉にしたるものを雑炊とて、菜大根おしなへての野菜を味噌に煮、茶の子と唱へて、米麦の内を吉人前に式三勺又は四五勺もいるゝなり

郡奉行を勤めるなど農民の生活を熟知している亦八の記述はさらに詳しく、農民は麦と一緒になんばきびとを臼で挽いたちらしというものを雑炊にして朝食食べていたことを記録している。いずれにせよ、ほとんど同内容であり、「順拝記」の記述がかなり正確なものであることを裏付けることができる。

したがって、「順拝記」にはフィクションを含みつつも、実際の旅をもとに記されたものと考えられる。出版することが意図されていたためか、簡略な記載しかない他の道中日記にはないようなリアルな記述が随所になされており、四国遍路の実態を豊かに描き出すことができる。

(1) 西和夫編『伊勢道中日記 旅する大工棟梁』(平凡社・一九九九年)。
金森敦子『芭蕉はどんな旅をしたのか「奥の細道」の経済・関所・景観』(晶文社・二〇〇〇年)。

(2) 深井甚三『江戸の宿 三都・街道宿泊事情』(平凡社新書・二〇〇〇年)。
神崎宣武『江戸の旅文化』(岩波新書・二〇〇四年)。

(3) 金森敦子『伊勢道と江戸の旅 道中日記に見る旅の値段』(文春新書・二〇〇四年)。
(4) 『四国西国順拝記(愛媛県歴史文化博物館蔵、受入番号一〇一六)』については、愛媛県歴史文化博物館研究紀要、第6号(二〇〇一年)に資料紹介及び第三巻の資料翻刻を掲載した。なお、第三巻の記載にはルビが付されている部分が多かったが、本稿での引用にあたっては煩雑になるためすべて省略した。

(7) 新城常三『新稿社寺参詣の社会経済史研究』(塙書房・一九八二年)、山本和加子氏『四国遍路の民衆史(新人物往来社・一九九五年)』、四国遍路のあゆみ(生涯学習センター・二〇〇一年)、頼富本宏・白木利幸『四国遍路の研究』(国際日本文化研究センター・二〇〇一年)などがある。

(8) 『中国四国名所旧跡図』(愛媛県歴史文化博物館蔵、受入番号一三七一)。
(9) 本稿で「四国西国順拝記」との比較に用いた四国遍路の道中日記は次の九点である。
京都智積院の僧澄禅が承応二(一六五三)年七月一八日に高野山を出発し、四国を巡り十月二八日に和歌山に戻るまでの百日間に及ぶ『四国遍路日記』(伊予史談会双書第3集『四国遍路日記集』一九八一年)、讃岐豊田郡井関村の佐伯藤兵衛が延享四(一七四七)年二月二七日から四月十日まで四国遍路を行った四三日間の日記『四国辺路中万覚日記』(香川県史、第9巻・一九八七年)、寛政七(一七九五)年二月十七日に同行四人ともに出発し、帰宅二(三日)前と思われる四月十八日に記述が終わる伊予伊予郡上野村玉井元之進の六一日間わたる遍路の日記『四国中諸日記』(喜代吉栄徳『四国辺路研究』第一二号・一九九七年)、阿波の住民(氏名不詳)が寛政十二(一八〇〇)年三月二〇日に出發し、五月三日十九番の立江寺で打ち止めるまでの七三日間の遍路日記『四国遍礼名所図絵』(伊予史談会双書第3集『四国遍路日記集』一九八一年)、土佐土佐郡朝倉村の兼太郎が文化二

- (一八〇五)年二月十一日から三月十三日まで四国遍路を行った三日間の日記「四国中道筋日記」(喜代吉栄徳『四国辺路研究』第一号・一九九七年)、土佐北川郷長山村の新井頼助が四国遍路に出発してから七日目の文政二(一八一九)年二月二日より帰宅する四月一三日まで書き記した五七日間の日記「四国順拝日記」(広江清『近世土佐遍路資料』一九六六年)、讃岐三野郡吉津村の住民(氏名不詳)が同行八人とともに天保四(一八三三)年二月二〇日に出発し、四月二日に帰宅するまでの日記「四国順礼道中記録」(喜代吉栄徳『四国辺路研究』第三号・一九九四年)、武蔵旗羅郡中奈良村の野中彦兵衛が、同行一人とともに天保七(一八三六)年二月に居村を出発し、三月七日より打ち始め、四月八日に打ち止めし、五月七日に帰宅するまでの日記「四国遍路中并撰待附万貫帳」(喜代吉栄徳『四国辺路研究』第四号・一九九四年)、駿河駿東郡大御神村の天野文左衛門が同行二人とともに天保十三(一八四二)年正月二日より五月二七日にかけて西国と四国を寺社参詣した時の日記「西国四国所々泊控帳 参詣所并其外日記控帳」(『小山町誌』第二巻・一九九一年)。
- (11)(10) 『四国遍路道指南』(伊予史談会双書第3集『四国遍路記集』一九八一年)。
谷脇温子「愛媛県下の巡礼参詣絵馬に関する一考察 四国遍路と伊勢参宮の絵馬を事例として」(『愛媛県歴史文化博物館研究紀要』第四号・一九九九年)。
- (13)(12) 『四国八十八ヶ所大坂永代笠講宿泊附』(愛媛県歴史文化博物館蔵、受入番号一〇五〇)。
四力所の旅籠についても、食事なしの木賃のみでも泊まれるように料金設定がされていることから、木賃宿として数えた。
- (14) 『四国八十八ヶ所大坂永代笠講宿泊附』に見られる木賃宿の料金は、他の道中日記では最高で二〇文程度であるのに対して、かなり割高のように思える。
- (15) 道中日記の作者の階層を分けるものだけでも掲げると、讃岐井関村の佐伯藤兵衛、伊予上野村の玉井元之進、武蔵中奈良村の野中彦兵衛の三人は庄屋、駿河国大御神村天野文左衛門は庄屋の子供、土佐長山村の新井頼助は名本であり、いずれも上層農民といえる。
- (16) 『四国遍路道指南増補大成』は、真念が貞享四(一六八七)年に著した『四国遍路道指南』を、真念の同志の洪卓が増補改編したもので、江戸・京都・大坂の版元六名により、明和四(一七六七)年にはじめて刊行され、以後文化四(一八〇七)、十一、十二年、天保七(一八三六)年と版を重ねたが、愛媛県歴史文化博物館蔵の『四国遍路道指南増補大成』(受入番号九二八)は心齋橋の柏原屋清右衛門と小嶋屋勘右衛門の大坂の書林二人を版元にしており、本州から四国への渡海コースに讃岐志度浦が加えられるなど一部記述が異なる。
- (17) 『松浦武四郎紀行集』中巻(富山房・一九七五年)。
(18) 『順拝記』は『国書総目録』などにも見当たらないことから、何らかの理由で実際には刊行されないままとなったものと推測される。
- (19) 「農家業状筆録」(『日本農書全集』三十、農山漁村文化協会・一九八二年)。